

2U-14(P) 自宅外通学生における住み方の分析(2)

—男子学生の場合—

小俣 謙二(名古屋文理短大)

大学・短大生の学生生活における生活拠点としての下宿・アパート空間の重要性は今後増大するであろうとの予測から、新入生を対象に、新しい生活空間を快適にするための彼らの住み方に関する調査を行った。昨年度はそのうち、女子学生についての結果を報告したが、今年度は男子学生の結果を報告し、併せて男女間の相違について報告する。

方法は質問紙調査法を用い、大学・短大の新入生(入学後2-3ヶ月)を対象とし、現在の住まいの評価や空間のなわばり空間化などの行動について調べた。そのうち今回の報告の対象である男子被調査者は110名(平均年齢18.6歳:18-21歳)である。

結果の概要は以下の通りである。72.7%の学生が自ら下宿を希望し、住まいのタイプでは下宿・アパートが66.4%、マンションが27.3%で、女子に比べるとマンションの比率が低かった。リラックスできる場所としては帰省先の方がリラックスできるとしたのは32.7%、現在の住まいとしたのは11.8%で、女子に比べてやや現在の住まいの評価が低い。転居にあたり何か気に入りのものをもってきた学生は27.3%で、しかも家具や写真に比べるとCDなど音楽関係が多かった。また、自室の自己表出化を行っているのは36.4%であった。自室の評価では、好きとしたのは57.3%、自分らしさを表していると評価したのは48.1%であった。全体として、女子に比べて自室空間への関与度、こだわり度が低い傾向が窺えた。